宮古島地名雑考（2）
地名を〈地形と伝承〉で訪ねる　―城邊（ぐすくなぎ・こすくぢ）へ―

下地　利幸（宮古郷土史研究会会員）

はじめに

旧記類が記す「城邊（グスクナギ）」の地名（呼称）は、城辺地方に多く分布するグスク（城）遺跡に由来すると見るのが大方の納得するところとなっている。しかしその用語の「城（グスク）」は、いわゆる「当て字」であって、当て字としての「城（グスク）」表記が、果たしてその本来の語意としての「グスクナギ」に添う漢字表記だったのか、本稿では敢えてこのことを問題提起し、旧記が記す「城邊之四ケ村」、「下地邊之四ケ村」、また「城邊之内」、「下地之内」などの記録を糸口に、別の視点（地形と伝承）から「グスクナギ（グスクのあたり・城辺）」の呼称等について改めて考えてみることにする。

１　城邊（グスクナギ）の地名（呼称）由来について

「城辺という呼称の由来は詳細なる記録はないが大体次のことが考へられる、仲宗根豊見親が宮古の統治をしている頃、東部即ち辺地の方に於ては金志川豊見親が統治して、友利村、砂川村、新里村、宮国村の四ケ村を城（ぐすく）方と呼称していた。更に『大親』の統治時代に森林政策を司る『杣山方』に於て、その事業計画の中に城辺地方と呼称されていた事などからして、大体東部の辺ぴなところをそのような呼び方をしていたのではないかと思料される。」（『町制施行十五周年記念誌　1962　城辺町』）

※平良側から「東部の辺ぴなところ」を城辺と呼称したと見ている、城辺を「城＝グスク」からの地名由来とする認識は、この当時まったくなかったかのような記述となっている。

「城辺の呼称については、浦底御嶽由来記に「城ヨリ二里北方海端ニ有」とあることから、この御嶽は福里にあって砂川から２里ほどにあたる。このことにより、砂川を城と唱えていたと推され、平良、下地の４ケ村の例にならって友利、新里、砂川、宮国の４ケ村をさして城４ケ村、あるいは城の方、そしてその周辺に形成された集落を総称して城辺と呼んでいたようである。」（『ぐすく』　グスク分布調査報告書（Ⅱ）― 宮古諸島 ―　1990年３月　沖縄県教育委員会）

＜『琉球国由来記』(1713 年)「〔各所祭祀〕宮古島　嶽々由来の事　浦底御嶽　男神。盛大殿豊ミヤト唱。(城ヨリ二里程北方海端ニ有)」＞

※「砂川を城と唱えていたと推され」る（城４ケ村、城の方、城辺)、「砂川を城と唱えていた」果たしてそのようなことがあったのだろうか。

「御嶽由来記」(1705 年）は「城邊之四ケ村」が崇敬する御嶽として山立御嶽、高津間御嶽、嶺間御嶽の３御嶽をあげ神名とその由来を記録している。この４ケ村とは上記の友利、新里、砂川、宮国の４ケ村をさしているものと思われる。３御嶽はいずれも友利村に立地している。また同由来記は「下地邊之四ケ村」が崇敬する御嶽として池の御嶽、赤崎御嶽、石城御嶽の３御嶽をあげて神名とその由来を記録している。「下地邊之四ケ村」とは川満、上地、洲鎌、与那覇の４ケ村であろうと思われる。

『雍正旧記』(1727 年）は、平良（蔵元）の東方に位置する宮國村、新里村、砂川村、友利村、保良村、平安名村の六ケ村を「城邊之内」の村と記して、南部に位置する川満村、上地村、洲鎌村、与那覇村、嘉手苅村五ケ村を「下地之内」の村と記している。

城邊（グスクナギ）の地名（呼称）は、「グスク（城)」遺跡に由来すると見るのがもっとも有力とされている。城辺地方には高腰（タカコシ・タカウス）城跡や野城（ヌグスク）遺跡などのグスク遺跡が城辺北方海岸から東部一帯にかけて多く見られることから、その一帯を「グスクナギ（グスクのあたり・城辺)」と呼称したとされている。

しかし城辺の北方海岸から東部一帯に多く見られるグスク遺跡をもって、なぜに宮古では南岸一帯に位置すると見られる友利、砂川、新里、宮国の４ケ村をさして「城邊４ケ村」、あるいは「城の方」なのだろうか、民俗方位でこの一帯も等しく「アガス（東)」と認識されての「城邊（グスクナギ)」呼称だったのだろうか。

「雍正旧記」は「城邊之内」の城として比嘉北方に割拠した高腰按司の「高腰城」と友利地方に割拠した金志川豊見親の「金志川城」の２城を記録するに過ぎない。このことは「城邊（グスクナギ)」の地名（呼称）が、必ずしも「グスク（城）遺跡」に起因するものだとは言いきれないものがあるようにも思われるがどうなのだろうか。

「名称のみを基準にすると、宮古諸島にはグスク遺跡は一軒のみである。「〇〇城（じょう)」と呼ばれる遺跡はいくつかあるが、それは当時からの名称ではないと考えられる。いくつかの宮古関係の文書に見られる「城」の用語は、すでにその遺跡が本来の機能を停止した後代の呼称である。もっとも、当時の用語が継承されている可能性がまったく否定さ

れるわけでもない。」（同上「グスク分布調査報告書」）

２　城邊（ぐすくなぎ・こすくぢ）をたどる

＜西仲宗根のぬし保里天太のこと＞（『宮古島記事仕次』 1748 年）

保里天太の二人の子（嫡子保古利屋盛、二男くじさかり）　保里天太の嫡子保古利屋盛と二男くじさかりの家督争い、くじさかりは兄の保古利屋盛に謀られて危機に瀕するが、機転をもって城を遁れて城邊箕の隅という山里に隠れ住む。保里天太もやがて「齢八十に余り（八旬余）」で子の保古利屋盛に城を追いだされ、箕の隅のくじさかりを頼って「こすくじさして只ひとりたとりゆく」も「老躰の身なれハ力なくよらへ不こといふ所につまつき倒れぬ、今ハ歩行かなハねハ城邊にゆく人に伝言してくじさかりに通じ」るが、はや息絶えてしまう。居士佐嘉利は泣く泣く天太の死骸を「よらへ不こに葬りしとなん、今にいたるまで彼所に其古跡あり」

○嫡子保古利屋盛、二男くじさかり、その名から連想されること

※保古利屋盛（ふくりやもり）ふくりむぬ（誇り高ぶる者）、膨れあがって態度がいかにも横柄で威張った人、「不くりや盛は天性お不やうにして無能なり」

※居士佐加利（くじさかり）くっちむぬ（苦労する者）苦労を重ねて成りあがった人、「こじさかりハ兄にせバめられて箕の隅に居を志めし、彼村のぬしとなり男子を設けたり」

○箕の隅という山里（何故「箕の隅」なのか）

※〔箕山〕中国河南省登封県の南東にある山。堯（ぎょう）帝のころの隠士許由が隠れた所という。箕山の志（中国上代、許由が、天子の堯から位を譲ろうと言われたのを、汚れたことを聞いたと、えい水で耳を洗い、箕山に隠れたという故事から）世の中の名利をさけて節操を守ろうという堅い考え。（『広辞林』）

＜忠導氏おやけ屋の大主といふ人あり、任友利首里大屋子、博学にして好古長者也、暇の日番字を以て宮古嶋の古事を誌さる、その事最盡せり＞（記事仕次「序文」）

慶世村恒任はこのおやけ屋の大主が誌した『宮古島記事仕次』について「番字を以て書したとあれば或は漢字を以て宮古地方語を多く当てて書したであろう」（『宮古史伝』）と述べて、大主を和漢の文体に通じ「当代異数の学者で文を能くした」人と評している。大主は古代中国の故事にも精通していた、そのことを思わせる「箕の隅」であるよう思われる。

○「よらへ不こ」の地

※「よらへ不こ（今にいたるまて彼所に其の古跡あり）」、保里天太がつまづき倒れた所、「こすくぢ」さしてたどりゆく保里天太が、よろよろとよらばいながら斃れ臥した地、そこが「よらへ不こ」。

○「こすくぢ」さしてたどりゆく

＜「（城を）遁れいて城邊箕の隅といふ山里に隠れ忍ふ・・・」、「城を不となくおいたされ、こすくぢさして只ひとりたとりゆくこそ不便なり・・・」、「今ハ歩行かなハねハ城邊にゆく人に伝言して・・・」＞

※「城邊（ぐすくなぎ）」と「こすくぢ」は同義として使われている（漢字表記としての「城邊」、ことばとしての「こすくぢ（くすくぢ）」）

＜蔵元（平良）から城邊（ぐすくなぎ）への道程＞（『雍正旧記』）

城邊之内

御蔵元より巳午ノ小間ニ當ル、中間弐里拾九町拾間、嘉手苅村より宿次三拾壱町五拾間、宮國村

城邊之内

御蔵元より巳午ノ間ニ當ル、中間弐里参二町五拾間、宮國村より宿次ニ弐拾五町五拾八間、　西方　新里村、　真中　砂川村、東方　友利村

３　「グスクナギ」を方音で考える

旧記が記す「城邊之四ケ村」、「下地邊之四ケ村」などの「城邊（グスクナギ）」、「下地邊（スムヅナギ）」の呼称は、それぞれ対応関係として使われた言葉だと見ることができる。「城邊」「下地邊」の地名が平良（蔵元）側から見ての呼称であれば、地勢上からいえば、平良側からみて、南に位置する「下地邊之四ケ村」は下の地（スムヅ）で「下って行く辺りの村」、東部に位置する「城邊之四ケ村」は東の地（アガイヌヅ）で「上がっていく（越していく）辺りの村」とみることができる。

「下地邊」は文字通り平良から下の方（南）の地で「下の地（スムヅ）あたり」ということになる。平良からみて「下地邊（スムヅナギ）」が「下って行くあたり」であれば、その対応関係にある「城邊（グスクナギ）」はどうなんだろう、「下地邊（スムヅナギ）」のような分かりやすさはないが、それでも「上がって（越して）いくあたり」の意と見ることはできないだろうか、東部（アガス゜）へのイメージと重なって「城邊（グスクナギ）」にはどうして

も「上がって（越して）いくあたり」の意、その事を思わせるものがある。

「仲宗根豊見親八重山入の時あやこ」（『雍正旧記』 1727 年）は、仲宗根豊見親の八重山入り（1500 年）に随う宮古各地方の有力者たちを次々と名揚げして歌いあげるアヤゴとして知られている。その 19 節～21 節は、「城なぎ」から友利の金志川金盛とその弟なき当ツ、砂川の神司あふかめ（あふがま）津づの主が随ったことをうたっている。

19　金志川の豊見親金盛とよ

20　城なき弟なき当ツとよ

21　砂川あふかめ津ヅの主とよ

慶世村恒任『宮古史伝』（復刻版　1976 年、以下「史伝」）はその附録に修める同アヤゴの（逐語訳）で「城（ぐすく）なき」については、単に「城の」と訳すのみでとくに言及はしていない。稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』（1977 年）は「『城（ぐすく）なぎ』は城辺附近の意、『なぎ』は『東（あがい）なぎ』下地なぎ等方向を示す言葉」だと解釈している。」「城（ぐすく）なぎ」（城辺附近の意）をいうに「城（ぐすく）」についてはふれず、「『なぎ』は『東（あがい）なぎ』下地なぎ等方向を示す言葉」だと解釈する、この稲村の解釈は、「下地なぎ」の対応語としての「城（ぐすく）なぎ」を「東（あがい）なぎ」と同義の言葉としてみていたもののようにも思われる。

「下地邊（スムヅナギ）」の対応語としての「城邊（グスクナギ）」呼称、この「グスクナギ」の語意は、方音の読みであれば、実際に「越して（上がって）いく辺り」の意と解することができないわけではない、そのように思われるものがある。

方音の「ぐすくなぎ」が「城邊（グスクナギ）」と旧記に漢字表記された、いわゆる当て字としての「城（グスク）」表記、果たしてこのことが、方音の語意としての「ぐすくなぎ」に添う漢字表記だったのか、方音の「ぐすくなぎ」は本来「腰越い（くすくい→くすく）邊（なぎ）」を語意とする「ぐすくなぎ」で、「（嶺の）腰＜クス＞を越していくあたりの地」を意味していたのではなかったか、また上記「記事仕次」、保里天太の記事に見る「こすくぢ」は「腰越い（くすくい→くすく）ぢ（地）」で、「くすくぢ」は「（嶺の）腰＜クス＞を越していく地」の意となる。旧記が記す「城邊之四ケ村」へは平良（蔵元）から通うに、その道程で、島を南北にはしる野原岳（ウプダキヤマ）の丘陵をいずれ越えていったであろうことが考えられる。特に「城邊之四ケ村」の主邑をなす砂川、友利に至るにはそうであったように思われる。しかし実際には「城邊之四ケ村」を繋ぐ道は海岸線に沿ってひらいていたということである。そのことが事実そうであったにしても、平良からみた「城邊之四ケ村」は、やはりそのような村「（嶺を）越して（東に上がって）いくあたりの村」（腰越地＜くすくいぢ・こ〔く〕すくぢ＞あたり）として人々に意識されていたもののように思われる。

＜クスパナキシャ・マイパナキシャ＞

野原岳の丘陵をはさんで北側の集落は「クスパナキシャ」、南側の集落は「マイパナキシャ」の地名を得ている。クスは「後・北」マイは「前・南」、「パナキシャ」は丘陵の北側の端（パナ）が切れ（キシャ）て崖状に落ち込み断層をなしている形状からの地名であろう。丘陵の北側は「クス」、クスは「後（クス）」であり、また「腰（クス）」で後ろの意ともなる。野原岳の北側一帯の地名は「野原越（ヌバリグス）」で、「ヌバリグス」の「越（クス）」もやはり野原岳北側の地を意味しての「後（クス）」であり、また「腰（クス）」の意ともなる。このことで「ぐすくなぎ」の語意が、漢字表記で「腰越い（くすくい→くすく）邊（なぎ）」と解されるのであれば「くすくい」は「腰（クス）」「越（クス）は、また「後（クス）」の意ともなって、「ぐすくなぎ」は「すむづなぎ（下って行くあたり）」の地に対応しての「（丘陵の）腰（後）を越していったあたり」の地を意味する「ぐすくなぎ」呼称だったことが考えられてくる。

＜「城邊四ケ村」は底地（スクズ）に立つ村＞

あるいはまた「ぐすくなぎ」は「越底（くすすく→くすく）なぎ」からの「ぐすくなぎ」で、「（嶺を東に）越していった底の地あたり」を意味しての、「ぐすくなぎ」だったことも考えられる。元島（ムトズマ）として遺跡を残すかつての「城邊之四ケ村」はいずれも海岸端の低地に立地する村であり、村の立地する海岸端の低地を「底地（スクヅ）」とみれば、「城邊之四ケ村」は平良側から見れば「（嶺を遠く）越していった底の地あたり」に立つ村ともみられていた、そのようなこともまた考えられる。

この事で思われることは先の「町制施行十五周年記念誌」が、平良側から見た「東部の辺ぴなところ」を「城（ぐすく）方・城辺地方」と呼称したのではないかとする城辺の呼称由来である。「東部の辺ぴなところ」を何故に「城（ぐすく）方・城辺地方」と呼称したのか必ずしも明確なものではないが、もし仮にそうであったとすれば「ぐすくなぎ」の漢字表記としての「城」は、その意に添った適切な表記とは言えず、「東部の辺ぴなところ」を「ぐすく（城）方」と呼称したのであれば、ここでもやはり「城（グスク）」ではなく、「後（クス）」や「腰（クス）」「越（クス）」、また「底（スク）」などの漢字表記がひとつの意味をもって見えてくるように思われる。

方音としての「ぐすく」を漢字表記するに、旧記はこれを一字の語意と見て「城（グスク）」と表記した。（旧記の編者は沖縄本島で「グスク」と呼ばれる遺跡〔城趾〕が多くあることを、その知識や実見で広く認識していたのであろう）、しかし方音としての「ぐすく」が、本来「クス（腰・後・越）」、また「スク（底）」などの要素を合わせもつ複合語だったと解されるので

あれば、「ぐすくなぎ」は見てきたように、こうした語意に由来する地名（呼称）だったことが充分に考えられてくるように思われる。

４　野城（ヌグスク）の地名について

もともと宮古では城や村（あるいは城跡や村跡などの遺跡等）を「グスク」と言い表すような、そうした言葉は無かった、言葉としてのそうした共通概念は無かったように思われるがどうなのだろうか。

＜野城遺跡と野城泉（ヌグスクガー）＞

野城（ヌグスク）遺跡は、城辺福北集落の北方海岸の丘陵上に形成されるグスク遺跡で、「本遺跡は沖縄諸島にみられるグスクや八重山諸島のスクのような性格を有している」とされ、「遺跡の立地する丘陵の南西部は道路を隔てて石灰岩台地をなし、台地北東端部には湧泉（野城泉）がある」と報告されている（前記「ぐすく」報告書）。また同「報告書」は前記したように「名称のみを基準にすると、宮古諸島にはグスク遺跡は一件のみである」と報告している。この「一件のみ」がここでいう「野城遺跡」だとされている。ここでは野城（ヌグスク）遺跡の地名「ヌグスク」を「野城泉（ヌグスクガー）」とあわせて考えてみことにする。

方音の「ヌグスク」は漢字表記されて「野城（ヌグスク）」と呼称されている。方音の「ヌグスク」を「野城」とする漢字表記、これもいわゆる当て字で、ヌグスクを「ヌ（野）」と「グスク（城）」からの語意と見ての「野城」、果たしてこの当て字、「野城」もまた適切な当て字だったのだろうか、ヌグスク、ヌグスクガーの「ヌグスク」を「ヌ、グ、スク」に分けて「スク」に「底」の字を当ててみると「ヌグスク」には、漢字表記の「野城（ヌグスク）」とはまた別の、まさにその方音「ヌグスク」にふさわしい地名が、その地形と重なって見えてくるように思われる。

「ヌグスク」は「野後〔端〕の底（ヌゥ、グスヌ、スク）」の意で、「台地状に広がる野の後（端）の底地」を意味し、「ヌグスクガー」は、その「野後〔端〕（ヌゥ、グス）ヌ底（スク）」の地から湧きだす「カー（泉）」だと理解したい。「ヌグスクガー」から湧き出た水はその流域を潤しながらやがて「浦底（ウラスク）」の浜へと流れでる。

「ヌゥグスヌスク→ヌグスク」、「ヌグスク」の「スク」は「ウラスク」の「スク」と同義で、方音では同じく「スク（底）」の意であって、それが記録された当時にあって「ヌグスク」は「ヌ」と「グスク」からの語意とされて「野城」と漢字表記された。このまったく別なる漢字表記、このことは記録する側が、その土地や地名についてどう認識し、方音（ことば）をどう理解したのか、そのことによってもたらされたものであったのかも知れない。

方音の「ヌグスク」が、本来の語意として「野城（ヌグスク）」を意味するものでないのであれば、宮古では「一件のみ」とされる「グスク（城）」名称は、もはや一件もないということになるのだろうか。

城辺比嘉部落北方丘陵上に形成される高腰城跡は、石積遺構を今に残して、沖縄本島のグスク遺跡の形態をよく伝えているといわれている。しかしこの遺跡も名称では「タカウスグスク」ではなく「タカウスジョウ」と称されているということである。このことなどを考え合わせれば、宮古では元もと城や村、またその遺跡なども含めて「グスク」と言い表す、そうした共通概念のような言葉（語彙）はなかったものなのかも知れない、そのようにも思われる。

先の「グスク分布調査報告書」は「宮古諸島を文献でみるかぎり、いわゆるグスクと称するものは一般的ではない、沖縄諸島と異なり直接的に城の字が使用されている。このことは、それが当時、グスクと呼ばれていたものを、あえて城に当て代えたのか、あるいは、記録時期にはそもそも語彙が無く、城の字が選ばれたのか定かではない」と「グスクに関する伝承及び古文献等」の章で述べている。

〇野城は野城按司の以前から「ヌグスク」であった

野城按司が野城に割拠する以前から野城は「ヌグスク」であった。つまり野城按司がいつの頃か宮古島の北東海岸沿いの地名のない「野」に現れて、そこに住居し「城（グスク）」を構えて割拠した、このことでその地が「野城（ヌグスク）」の地名を得た、のではなくて、野城按司がこの地に割拠する以前から「ヌグスク」はやはり「ヌグスク」として、その地名を得ていたはずである。そのことはこの地に「野城泉（ヌグスクガー）」があることで歴然としている。平良にある盛加越の地が盛加泉（ムイカガー）からの地名であるように、野城もまた同じく野城泉（ヌグスクガー）に由来する地名であったはずである。

野城按司は、ヌグスク泉（ガー）の水源のあるヌグスクの地に住居し「城（グスク）」を構えてその地方を領していた、このことで野城按司と称された。そうであればヌグスクの「野城」表記は、野城按司が構えた「グスク（城）」を意識した後世の人の漢字表記であれば、その「城（グスク）」をみない以前から呼称されていたであろう、方音としての「ヌグスク（ガー）」の語意がはたしてどうであったのか、このことがまず問われなければならないはずである。

「城（グスク）」をみない以前の「ヌグスク（ガー）」の語意として考えられるのは何か、それが〔「ヌグスク」は「野後〔端〕の底（ヌゥ、グスヌ、スク）」の意で、「台地状に広がる野の後（端）の底地」を意味し、「ヌグスクガー」は、その「野後〔端〕（ヌゥ、グス）ヌ底（スク）」の地から湧きだす「カー（泉）」だと理解したい〕とする先の見解であった。

＜ヌグスクを「野越し（ぬぐシキ)」と表記する用例がみられる＞

クイチャーアーグ「西銘（にしみ）のまむい（狩俣)」

にシみぬ　まむイ	西銘〈地名〉のマムイ〈女の名〉は
あやまーイ　みやらびよー	知れわたった乙女よ
ぬぐシキあイや	野越し〈地名〉の按司は
さキやまぼーやよー	崎山坊〈人名〉は
あシビむぬやりば	遊び好きな者だから
ぶどぅイむぬやりば	踊り好きな者だから
にシみん　かゆい	西銘に通い
オわりん　かゆいよ	上手〈北〉の地に通い

（以下略）　（『南島歌謡大成』Ⅲ宮古篇）

このクイチャーアーグ「西銘のまむい」が、何故に、こうして狩俣で歌われ伝えられているのか、興味深いものがあるが、このことについては別の機会に譲ることにして、ここでは歌詞にみえる「ぬぐシキあイや」の解釈「野越し〈地名〉の按司は」について述べるに止める。アーグ（歌謡）は歌い継がれ今に伝えられてきた、アーグの歌い手たちは「ぬぐシキあイや」の「ぬぐシキ」（地名）を「野城」ではなく「野越し」だと意識して歌い継いできた、このことからの「野越し」解釈（漢字表記）なのであろう思われる。そうであれば「野越し」の「越し（ぐシキ)」は、先に記した「野原越（ヌバリクス)」や「盛加越（ムイカクス)」などの「越」と同様、野（ヌグスクガー）の北方の地（後・クス）を意味しての「野越し（ぬぐシキ)」地名であって、これが本来の語意であれば、先に記したように「野城」は野城按司の「グスク（城)」を意識した後世の人の漢字表記だったことが、いよいよもって明かであるように思われる。

5　新城（アラグスク）の地名について

新城村は 1743 年頃に村立されたようである。城辺の旧役場跡を通って福里集落をすぎるとやがて福里・新城丘陵が走る難工事の急坂にかかる、石灰岩の岩盤を掘り下げたこのＳ字型の坂道を下る左手側の盆地状低地に新城集落は位置している。難工事の坂道が開かれる以前のこのあたりの地は今にもまして低地の感があったはずで、いわゆる底地として意識されていたように思われる、地形、新城（アラグスク）の地名を考えるにあたっては、まずこの地形をみることがひとつの前提となるもののように思われる。

「アラグスク」これもまた、「アラ（新)」と「グスク（城)」からの地名語意なのだろうか、これをその地形から「新越〔後〕の底（アラ、クスヌ、スク)」を意とする「アラグスク」地

名だとみることはできないだろうか。「アラグスク」の本来の語意は「アラ、グスヌ、スク」で、新たに難工事坂の嶺（ンミ）を越したその後（クス）の底地を意味しての「アラグスク」呼称だったように思われる。

〇海岸名としての「アラグスク」

新城村の地名をその周辺の地形をみながら考えてみたのであるが、ここでひとつ思いだされたことは新城村の東北に位置する海岸、新城海岸のことであった。海岸名の新城（アラグスク）、村名とする新城（アラグスク）、はたしてこのふたつの「アラグスク」地名はどちらから先に呼称されたものなのだろうか。

新城村は 1743 年頃に村立されたようで、保良村の成立（1716 年）に比して比較的に新しい村とされている。保良村の村名が海岸地名の「保良」や保良ガーの「保良」から名付けられた「保良村」だとされるのであれば、「新城村」もやはり村立するにあたって村の東北に位置する海岸の地名である「アラグスク」をとってその村名としたことが考えられる。

海岸の地名である「アラグスク」が先に呼称されていた。では何故に、その海岸の地名は「アラグスク」だったのだろうか、新城の海岸、その地形、この地に下り立ってみて思ったことは、浦底海岸と基本的に地形を同じくする海岸だと思われたことであった。海岸に下りる坂道、その坂道を少し入って左手側には、一枚岩の切り立った大岩があって、その底部の穴状の隙間から湧水がほとばしって流れでており、そこには「湧水　プイキャー」の標識が立っていた。「野城ガー」は、浦底に下りる坂道を少しはいった左手側、石灰岩台地の裾野の岩間から湧き出ている、同じくする地形は水脈、その形態をも同じくするものなのであろう。

浦底（ウラスク）、海岸線背後に横たわる丘陵を急傾斜で下りていく浦底は、地名そのまま下りついた底地の前面に広がる浦であった。また浦底の西北側に位置し、地形を同じくする長間底海岸の「長間底（ナガマスク）」も同様で、これも長間から丘陵を下りていった底の地を意味しての「長間底」であった。新城（アラグスク）海岸に至る地形もまた浦底、長間底と同様なのであれば、このことでも私は、地名とする「アラグスク」の「スク」に「底（スク）」の意をみてとるものである。「新越〔後〕の底（アラ、クスヌ、スク→アラグスク）」、新城海岸、これもまたその後背地に台地状に広がる丘陵を下りていった底地の前面に広がる海浜であった。

新城村は村立のさいに「アラグスク」を村名とし、これを漢字表記で「新城」とした。このことで「アラグスク」の「スク（底）」はもはや忘れ去られ、それこそアラグスクの底地に埋もれてしまったのであろう。

○「荒牛」と「新腰」の地名

新城海岸一帯の地は「荒牛」と地名されているようである（『宮古の遺跡』沖縄県教育委員会　1983 年)。「荒牛」は「あらうす」と読むのだろうか、「城辺町保良地区の遺跡分布」（城辺町教育委員会　1980 年）では高腰城趾の説明の中で「新牛（あらうす）の女按司」は高腰按司と婚姻を結んだと記されている。地名とする「荒牛」は、この女按司の「新牛」とかかわるものなのであろう。「史伝」はその附録に修める「高腰の按司のアヤゴ」で「新腰（あらうす）ん根下（を）り居る按司加那志　新腰は女按（めどむあず）司生れ居（を）てい」と新腰の女按司がアヤゴで歌われた、その物語を解説している。

新腰の女按司が「召使百人、下男百人をかき集め、牛百頭余」（同「アヤゴ」）を飼って、響んだ地がどこだったのか特定するにいたっていないようである。しかしこうした地名の「荒牛」や伝説、アヤゴの記録などから、新城海岸の後背地をなす丘陵台地の一帯が想定されるものと思われる。

「荒（新）牛」の「牛（うす)」、これは女按司が牛を百頭余飼っていたとする伝説から派生したもののように思われる。「宮古史伝」は「新腰（あらうす)」と表記している。「腰（うす)」これは「腰（くす)」であり、「腰（くす)」は「後（くす)」また「越（くす)」などの意ともなることは先に述べた。「アラグスク」が「新越〔腰・後〕の底（アラ、クスヌ、スク)」を意とするのであれば、ここでもまた「アラグスク」は、新腰の女按司が居住していたであろう丘陵台地を腰（後・越）し（下り）ていった底地を意味しての「新腰ぬ底（あらくすぬすく)」からの「アラグスク」が見えてくるように思われる。

○「フカスク（深底)」の地名を残す地

「新城から保良の入口へかけての深底地帯は、最近はそれほどひどくはないが、大雨でも降ると、一面の水海と化したもののようだ。深底では、井戸穴式に、水を地下におとしこむ方法で、排水を行なっている。新城北方の凹地も、地表をとおして排水することができず、同様に、地下洞に流しこんでいる。」(「城辺町立福嶺中学校　記念誌　創立五十周年」2000（平成十二）年三月発行　〔復刻　私たちの福嶺郷〕)

○おっぱい山と巨人伝説の地

二つの森と泉

新城（アラグスク）の南（パイ）にある　西（イい）の森（ムい）　東（アガい）の森は　むかし　とても大男　力持ちの大男がいて　こんな大きな岩を海から　アウダ（もっこ）にのせて　アウク（天秤棒）に担いで　ヤイサガヤイサと　来たそうだ　けれどもフサーキ嶺（むみ）というところで　ぴサーキリ（足を蹴って）

つんのめり　そのはずみで　大岩も投げだされて　大男が担いできた東　西の森として　そのようにいるそうだ

大男が蹴ったところは　くぼんで穴になり　どんな日照りにもかれることのない　そのような水が湧きでて流れている　その湧き水は　いまでも北の海へ流れているよ

（『城辺町史』第五巻　民話編）

大男が担いできたもっこから投げだされてできた東西二つの森は、今では、その形状から、いつしか「おっぱい山」と呼ばれ、新城集落の入口にあって、集落の象徴として人々に親しまれている。大男はまた神さまだったとも云い伝えられていて、その神さまが転んでできたくぼ地はティダプスギャ（テイダが掘った井戸）と云われ、これも新城部落北方にあるということである。国土を造成する神話的要素をも伝える説話で、こんもりと東西に並ぶ二つの森の形状から、その由来を語る伝説として伝えられたものであろうが、低地帯で水害に悩まされた新城村にあって少しでも土地を押し上げたいと願う、人々のそうした心意の現われとして語られた説話でもあったのかも知れない。

6　保良（ブラ）の地名について

＜蔵元から保良村への道程＞

城邊之内

御蔵元より辰方ニ當ル、中間四里四町五拾弐間、友利村より宿次壱里弐拾四町五拾間、

保良村

○平安名村　「雍正旧記」は保良村につづく村として「保良村より宿次弐拾弐丁参拾九間平安名村」を記録している。平安名（ピャウナ）村は東平安名崎根元部分から南西方に位置し、近世の頃の村とされるが、いつ頃成立した村なのかよくわかっていないようである。「宮古・八重山両島絵図帳」（1647 年）に「おろか間切之内　百名村（ひゃくなむら）」とあるのが、その平安名村とされているので、その頃までには村は成っていたとみられている。平安名村は明治の初期頃までは存続したようであるが、その後村人は、保良と割目（現・吉野）に移住し村が絶えたといわれ、今はその村跡に、村の創始者を祀るという「平安名御嶽」を残すのみとなっている。

伝説では平安名村は子守りが育てた村と伝え、また龍によって滅ぼされた保良元島から逃げのびたわずかの人たちによって立てられた村とも伝えられている。

太陽（ていだ）とパナリ

ピャウナのパナリ（離れ）はもとは島で人も住んでいた、むかしは太陽（ていだ）も人間と交わっていたそうだ、　そうして天から降りて、二号をつくり、その女との間に子どもができて

いた。　テイダは時々、天から降りて来られ、女のもとに通っていた。ある日　行くと　女はいないで、子守が、子守しながら歌を歌っていた、「うふぁが母親あー　ウーニャーウ　取り来し　テイダう企までぃ」と、こんなアーグを歌っていたそうだ。テイダの神さまはこれを聞いて大変に怒り、子守から子どもを取りあげて「うふぁ　大島（宮古島）ん行き　豊嘉り」といって放り投げて、パナリ村はテイダの神さまが踏みつぶしてしまった。　子守りはピャウナという所へ行って、成功したそうだが、ピャウナ村は子守りが育てた村だったので、そんなに大きくはならなかったといことだ。

（『宮古島　城辺町の昔話』 1991 年　同朋舎）

「子守唄内通」型の話型に分類されるこの説話は、神の怒りをかって村が滅びるのであるが、また一方では新たな村立（再生）をも語る、そうした創世神話的伝承ともみられている。テイダの神さまが踏みつぶしたパナリ島は、そこから流れ出て、南へと流れ、砂川の沖から与那覇へと流れついて、そこで止り、それが今の来間島になったということである。

流れ島伝説

娘子ぬ布織んてぃうりばどぅ、平安名崎から島が折れて流れて来たそうだ。これを見た母親が、「島ぬ流りぃ来すっさぁ、かりゅぅから、行き掴みる」と言ったそうだ。機織り機に備えつけのピサバン（筬）、糸をさしていくチャンチャンと鳴らすものをピサバンと言うよ、布をはさむものはバタムヌ、この三つ〈布、ピサバン、パタムヌ〉を備えて布織りしだすと、夢中になって、母親、父親ぬ死んふつまい知さん（死んだことさえも知らない）とのじゅく（謂れ）だからね、そのようにずっと織っていた時に、布の中ほどに織り進んだ頃が、布織りは一番熱中するから、そのような時に、平安名崎から島が折れて流れて来たそうだ、「あれから先に、摑まえよ」と言っても、「んにゃ一すずき（一糸）織りってぃ、んにゃ一すずき織りってぃ」と言って織っているうちに、島は流れて行って、あの来間島で座ったということだ。（同上「城辺町の昔話」）

○保良の地名について

「伝説や史実にも保良という地名の由来については述べられていません。悖羅、婆羅とあるだけです。東の浜に大きな法螺貝が漂着したので法螺ということになったと聞いたことがありますが、信用できないと思います。保良とは保良川（泉）の形容から出た地名ではないかと思います。あくまでも推察でありますが、保良川は大昔法螺貝の様な形をした洞窟から流れて外部に湧出ていたと思います。それでその洞窟の形が、法螺貝の様にうずを巻いた形であったから法螺川と呼び附近の地名を法螺と名付け、変化して保良となったと思います。」（前記「保良地区の遺跡分布」）

○保良の地名を「保良湾」で考える

「保良（ボラ）＝大浦（ウプウラ）、ウプウラ→プウラ→プラ」、「ウプウラ」の「ウ」２字が抜けて→プラ→ブラ・ボラ（保良）、平良の北部に位置する大浦（ウプラ）村の呼称（地名）が、村の南方前面に広がる大浦（ウプラ）湾の大浦（ウプウラ→ウプラ）に由来する地名とみられているように、保良村の「ボラ」もやはり保良村東端の保良泉（ガー）からおりた海岸の地名「保良」に由来する呼称であったように思われる。保良泉をおりた海岸から東平安名崎にかけての海岸線一帯には、保良泉眼下の海岸を含め三か所の浦（湾）をなす地形をみてとることができる。保良の地名は、先に記したようにこの海岸線の地形を大きくひとつの浦（湾）とみて呼称された大浦（ウプウラ）からの地名由来で、「ウプウラ」の音が「ブラ」に詰まり、これが「ブラガー（保良泉）」、「ブラ（保良）村」の地名（呼称）ともなって、記録するに「保良」と漢字表記された、このようなことが考えられる。

＜婆羅公管下密牙古人民＞

〔元史　温州府志〕の記録　元の延祐四年（１３１７年）六月、中国温州永嘉県の海島に、舵のない十四人が乗った小舟が漂着した、この時、その人たちと言葉が通じなかったが　ようやく言葉に通暁の人を訪ね得て、問い調べたところ、海外に係る「婆羅公管下密牙古人民」で、およそ六十余人が大小二隻の船で「徹里即地面（シンガポール）」へ交易に往く途中、嵐に遭遇して、大船は壊れ、小舟に乗った十四人だけが、ここまで流されて漂着したということであった。そこで泉南に往くようにといわれ、連れて行かれた、（泉南では）かの地（密牙古）に往く人があったので、便（すなわち）帯同して本国（密牙古）に回送された。

この元史、温州府志「婆羅公管下密牙古人民」の記録は、必ずしも宮古（人）の確たる記録だと言いきれない面もあるとされるが、「婆羅公管下の密牙古人民」の「婆羅」は保良で、「婆羅公」はその統治者のことであろうとされている。この保良は「雍正旧記」が「保良村は往古も村為有之由候処、致落去野邊ニ成り候処ニ、康熙五十五丙申年、今の保良村相立候事」と記録する「往古の保良村」で、現保良村から東北方の海岸端に保良元島として今に遺跡を残している。

保良元島は概ね十三～十五世紀を中心とする時代の集落であろうとされている。保良元島の居住者たちは海外交易を営み大いに栄えた時期があったようで、この元の延祐四年（1317年）の記録は、その集落活動の最盛期にあった「婆羅公管下の密牙古人民」が海外交易を行なった、その活動の明らかな記録であろうとみなされている。またこの「婆羅公管下密牙古人民」の記録は、宮古（人）が初めて歴史の舞台に登場した、その宮古の歴史の画期をなす

記録としてもつとに知られているところでもある。

元島の滅亡（保良元島の龍退治）

むかし、保良元島近くに大きなほら穴があり、龍の親子が棲んでいた。親龍はクバマ嶺から天に昇ったり降りたりしていた。親龍が天から降りてクバマ嶺から茅野の中をうねって横切ると、茅はすべて敷きくだかれ、野原中のバッタは空に舞い上がりまるで雲のようだった。

親子の龍は、たびたび元島の人間を襲い苦しめていたので、ある日、村人全員が談合し龍を退治することになった。龍がほら穴で寝ているすきに火をつけて焼き殺そうという事になり、枯れ草や枯れ木を集めほら穴の二つの入口に押し込んで両方から火をつけた。けれどもその時に焼き殺されたのは子ども龍だけで、親龍は天に昇っていたために助かったそうだ。親龍は天から降りてきて子どもが焼き殺されたのを知り、大変に悲しがって声を出して啼いた。その啼き声が非常に悲しそうで長く尾を引くように聞こえていた。その親龍の啼く声を聞いて、物知りの人がヤシの実で胡弓（クウキヨ）を作り出した、クウキヨの音は、龍の啼き声から生まれたものだそうだ。

子どもを殺された親龍は大いに怒って、元島の人間に襲いかかり、次々と食い殺してしまった。こうして元島は滅びてしまったということだが、生き残ったわずかな人々は、龍に追われて元島から逃げて、サキバリズマという所で住むようになった。しかしこの地ではマラリヤのために定着できず、そこからまたピャウナズマという所に移り住むようになった。ここでは一時栄えていたが、その後ピャウナズマも滅びてしまったそうだ。

（話者は保良の塩川敬治さん　明治３１年生、昭和５２年８月聞き取り）

○「サキバリズマ」と「若坊元」

親龍に追われて逃れついた「サキバリズマ」は東平安名崎付け根から約四百メートルほど西方に崎山村遺跡として、今にその跡を残している。その崎山村跡には「若坊元（バカボウ御嶽）」があって「若坊帳主（バカバウチョウヌス）」（神名）が祀られている。「保良地区の遺跡分布」は「若坊帳主（バカバウチョウヌス）」は「村創立者の方」と思われるとし、また「『マムリヤのアヤグ』に出てくる崎山坊なる者はこの村出身者であろう。」とも述べている。

村人を喰い殺し元島を滅ぼした「親龍」、生き残った人たちが逃れついて村立てした「サキバリズマ」、村の創立者を祀ると思われる「若坊元（バカバウモト）」（若坊帳主（バカバウチョウヌス））、私には、その「バカバウモト」に祀られる神「バカバウチョウヌス」とは、ほかならず村人が焼き殺した子どもの龍そのものであったように思われる。龍はパウ（蛇）、「若坊元（バカバウモト）」の「若坊（バカバウ）」は「若い蛇」で、即ち子どもの龍を意味しての「バカバウ（若い蛇）」ではなかったか、伝説を踏ま

えれば、村人は焼き殺した子どもの龍を「サキバリズマ」を村立てするにあたり、祭式の場で鎮魂し、「サキバリズマ」の守護神として「バカバウ元（御嶽）」を仕立て祭り上げたもののように思われる。

「平安名のマムヤのアヤゴ」に出てくる「崎山の坊」、この者は、はたして崎山村の出身者であったのか、このこともまた興味深いものがある。「崎山の坊」が崎山村の出身者であれば「野城按司（のぐすくあず）の　崎山の坊や」（「史伝」）と歌われるその「野城按司（のぐすくあず）」をどう理解すればよいものなのか、先にみたように方音の「ヌグスク」が、「野城」ではなく「野越し（地名）」とも解されるのであれば、あるいはまた「ヌグスク」とは保良元島の地そのものを指しての「野越し（地名）」であって、「ヌグスク按司」はその元島を滅ぼした親龍そのものを暗示的に示すものであったもののようにも思われる。そうであれば「崎山の坊（ボウ・バウ）も、またやはり、云うように崎山村の出身者であって、それも「若坊元（バカバウモト）」に祀られる神「バカバウ（若い蛇）」で、すなわち元島の人たちに焼き殺された子どもの龍そのものであったのであろう。ピャウナの地が保良元島の人々が守護神と祀る「パウ（蛇・龍）」の鎮まる地であったのであれば、私にはやはりそのように思われるものがある。マムヤもまたそのピャウナ（蛇・龍）の地にあって、洞窟に籠って機織をし、神に仕えて祭祀を執り行う、そうした巫女としての「マムヤ・マムリヤ（真守りや）」であったはずである。

おわりに

城邊（ぐすくなぎ）、野城（ぬぐすく）、新城（あらぐすく）などの地名（呼称）を、その地の地形や伝承で、また方音の語意などで考えてみたときに、「ぐすくなぎ」「ぬぐすく」「あらぐすく」などの地名（呼称）に共通して見えてくるものがあった、それが「腰・後・越」などを意とする方音の「くす」であり、また「すく（底）」であった。方音としての「ぐすく」にこれらの漢字を当ててその地をみてみると「城（グスク）」では見えてこなかったその地の有り様がくっきりと浮かび上がってくるようであった。

「グスクナギ（城邊）」の地名（呼称）は、云われるように「グスク（城）遺跡」に由来するものだったのか、「町制施行十五周年記念誌」（１９６２年）の発行にかかわった当時の関係者ですらまったく意識しなかったかに思われるこの「グスク（城）遺跡」由来説、はたして再考の余地は無いものなのか、本稿では、敢えてこのことを取りあげて問題提起とした。

「平安名のマムヤのアヤゴ」は、「平安名（ぴゃうな）のマムヤ／新生れ女童（あらうまみやらび）　野城按司（のぐすくあず）の／崎山の坊や」と歌いだされる。「新生れ女童」とは何を意味するものだろうか、保良元島の滅亡、崎山村（また平安名村）の興りとその消滅（衰微）、その後新たに村立てされた保良村、このアヤゴは「滅びと再生（鎮魂と村立）」にかかわって、人々の心意がそのままマムヤにかけて表出されたア

ヤゴだったように思われるものがある。このことについては「旧記にみる鎮魂と村立の記録」のような表題で、別の機会にあらためてまとめることができればと思っている。